

芙蓉オートリース株式会社
IT・システム部 次長 横尾 陽一氏

20台を超えるサーバーを仮想化し、5分の1以下に集約。 次の目標となる全システムクラウド化に向けた5年プロジェクトを開始

芙蓉オートリース株式会社（以下、芙蓉オートリース）は、約6年をかけたサーバー仮想化プロジェクトを完了。次の目標として、クラウド化へと踏み出した。第1弾は、DominoのAWS移行だ。日本情報通信（以下、NI+C）はAWSの豊富なノウハウでプロジェクトをサポート。すでにAWS環境の構築を終え、アプリケーション開発フェーズが開始されている。

業種：情報・通信



芙蓉オートリース

1987年1月に芙蓉総合リース株式会社の自動車営業部が分離独立して設立。芙蓉リースグループの一員として自動車のリース事業のみならずEVのインフラ設備のリースや各種自動車の給油カード・ETCカード・IoT関連機器の提供、管理業務受託サービス、損害保険代理店業務など、モビリティに関する幅広い事業をしている。2022年度からスタートした芙蓉リースグループの中期経営計画「Fuyo Shared Value2026」において、CSV（Creating Shared Value 2026：共有価値の創造）の実践を通じた社会課題の解決と経済価値の同時実現により、企業グループとしての持続的な成長を目指している。

本社：〒102-0083
東京都千代田区麹町5丁目1番地1
住友不動産麹町ガーデンタワー21階

設立：1987年（昭和62年）1月

事業内容：・各種自動車およびEVインフラ設備のリース・割賦・売買
・各種自動車の整備・修理・保守サービス
・各種自動車の給油カード・ETCカード、IoT関連機器などの取り扱い
・各種自動車の管理業務受託サービス
・損害保険代理業

資本金：2億4,000万円

社員数：165人

URL：https://www.fuyoauto.co.jp/

サーバー仮想化を完了。 次は全システムのクラウド化へ

芙蓉オートリースは芙蓉リースグループのオートリース事業会社として1987年に設立された企業。自動車のリースおよび整備・保守サービスなどを手掛け、業界に先駆けてEVの専任セクションを設置するなど、自動車にかかわる社会環境の変化に先回りして対応する社風で知られる。IoTデバイスを含めたソリューションとして、顧客ニーズに最適化した提案力も強みだ。

同社はITインフラも時代に合わせて進化させている。現在、同社のITインフラ領域を主管するIT・システム部 次長 横尾 陽一氏は、2002年の入社。以来、サーバー／ネットワーク関連を中心に、さまざまなプロジェクトにかかわってきた。

横尾氏は、「入社した当時は一般的なオンプレミスシステムでしたが、2017年ごろからサーバーの仮想化に取り組み始めました。NI+Cさんとは入社以来ずっとお付き合いしていて、そのプロジェクトもNI+Cさんの提案を受けてスタートしたものです」と話す。

サーバー仮想化プロジェクトは、社内にあるすべてのサーバーを仮想環境に集約するというスケールで実行され、約6年をかけて段階的に行われた。最終的には20台以上のサーバーを4台の物理サーバーに集約し、ファイルサーバーやバックアップを除くすべてのシステムを仮想化することができた。

プロジェクトにおける最大の成果は、若干のコストアップを補って余りある故障率の低下と管理機能の向上だ。ハードウェア関連の業務負荷が大きく下がったため、チームのサービス範囲を広げることができた。

実は、サーバー仮想化プロジェクトは先を見た提案だった。まずサーバーを仮想化させ、次のクラウド化を構想したものだったのだ。横尾氏は、「2017年当時、顧客データを社外に出すことに抵抗感が残っており、さすがに時期尚早でした。ただ、将来はクラウドがスタンダードになるだろうなという感触はあり、実際にいまとなっては“まだクラウド使っていないの？”という意見の方が支配的です」と話す。「NI+Cさんも私たちも、提案時のことを覚えていて、いつかはクラウドに移行させようと考えてきました」。

2023年、いよいよ機は熟した。NI+Cより提案された「AWS Direct Connect」でのAWSへの専用ネットワーク接続を利用することで、極めてセキュアに運用できる環境が整えられた。NI+CもAWSプロジェクトを重ねて豊富な知見を得ている。そして、おあつらえ向きのニーズが顕在化した。物理サーバー1台の60%ほどを使用するシステムをアップグレードする必要に迫られたのだ。

各分野のスペシャリストが チームでプロジェクトを進めてくれる

アップグレード対象は、Dominoだ。当時運用していたバージョンのサポート期限が2024年6月に切れる。芙蓉オートリースはDominoを長く活用し、その歴史の中で必要なプロセスを取り込み、業務に不可欠な存在へと育てていた。他のソリューションへの切り替えも検討したが、一旦Dominoをバージョンアップし、保証期間中に再検討することとした。このため今後のDominoについては柔軟なシステム運用が必須とされていた。

そうすると、2つの選択肢が残る。仮想環境内でのバージョンアップと、AWSを使ったクラウド化だ。そして、4台の仮想サーバーに十分なキャパシティは残っていない。前者を選択すると、導入およびテストと並行運用のために5台目のサーバーを新たに購入する必要があった。仮に5年リースを組むとすると、クラウド化はそれだけ遅れることになる。

横尾氏は、「ネットワークコストが下がったことでAWS Direct Connectの選択肢を取れるようになりました。とはいえ、従量課金のシステムは私たちにとってほぼ初めてです。NI+Cさんに協力してもらってトータルなコストを試算し、経営の理解を得ることができました」と話す。「円安が進む中で試算していたので何度も金額を変更することになりましたが、仮想サーバーを1台追加するコストと比較して、納得してもらえる範囲に収められたのではないかと考えています」。

クラウド化により、機器の故障を気にする必要はなくなり、運用に伴う業務負担はさらに減ることを期待できる。プロジェクトは2023年秋に開始。環境のセットアップからスタートし、2024年2月末現在、AWSの環境構築は完了している。

横尾氏は、「AWSは初めてで手探り状態でしたが、NI+Cさんのサポートのおかげで私たちの理解も進み、スムーズに進めることができました。話を聞いて込み入った部分になるとスムーズに合いの手を入れてくれるイメージ。スペシャリストにとってはつまらない質問をいくつもしたかもしれませんが、いつもわかりやすく回答してくれて助かりました」と話す。

3月よりDominoの最新バージョンを設定し、構築とデータ移行を実施。5月のゴールデンウィーク明けから並行運用を開始する予定で、6月には完全な切り替えとなる。

「DominoもNI+Cさんが担当してくれます。各部門のスペシャリストがうまく引き継いでプロジェクトを進めてくれる点もNI+Cさんの良いところで、信頼してお任せすることができています」（横尾氏）

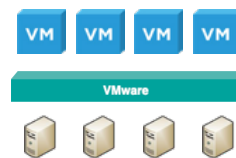
現環境

Server統合

- 故障率の低下と管理機能の向上
- ハードウェア関連の業務負荷減
- 運用管理チームサービス範囲の拡大



- On-premise環境
- VMware上に仮想基盤を構築
- 各サーバーを運用



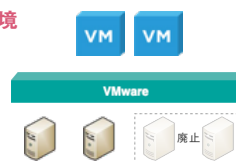
推進プロジェクト

Cloud IaaS利用

- インフラ関連の業務負荷のさらなる減
- 柔軟なリソース増強・運用
- 運用管理チームサービス範囲の拡大



- On-premiseとCloudのhybrid環境
- 保守切れサーバは順次廃止など
- クラウドリフト化
- managedサービスとの運用統合



- クラウドネイティブなサービス
利用促進(クラウドリフト!)



将来構想

Cloud Service (IaaS/PaaS/SaaS)利用

- Cloud Lift からCloud shiftへ
次世代基盤の構築
- MultiCloud環境 or Hybrid環境での
業務に合ったインフラ最適化
- 運用管理業務の変革推進
(ワークスタイル改革, コア業務への注力)



- オールCloud化の推進
(インフラ最適化によってhybrid環境も含む見極め)
- RDSなどPaaS(ミドルウェア)領域のサービス利用
- フルマネージドのSaaSサービス利用



- 様々なAWSサービスを
活用したシステム
(クラウドサービスへのシフト!)



(例)

5年以内のクラウド化が目標。 将来はマルチクラウドも検討へ

今後は、現在運用している仮想環境を順次クラウドに移行する。仮想サーバーのリースアップと足並みをそろえて段階的に移行する計画で、5年以内の完全なクラウド化を目指す。

現時点でクラウド化の課題は大きく2つある。まずは、バックアップ環境のAWSへの移行だ。物理的なテープのコストはAWSを利用するより安価で、コスト面では現状を維持するメリットはある。一方、現状の体制を維持する場合、運用に人手がかかるためトータルなコストを考えると移行した方が低コストになることも期待できる。

隔地保管はAWSのメリットが大きい。物理的なサーバーは日本にも海外にもあり、バックアップの内容に合わせて自在に使い分けができる。たとえば重要なデータは海外のデータセンターに分散させて3か所にバックアップしたり、重要性の低いデータの保管期限を短縮してストレージコストを圧縮したりする運用も可能だ。これらのメリット／デメリットを十分に検討した上で、バックアップ環境の方向性を定めていく。

もうひとつは、ファイルサーバーの移行だ。ファイルサーバーは物理サーバーで構築されているが、AWSにそのまま移行するとコストが割高になると想定されている。

横尾氏は、「実際のところ、不要なファイルがかなり多いのではないかと見えています。引き継ぎ資料などで、“一旦は置いておく削除できない”ファイルで、消せないけれど使わないものです。こうしたファイルを保存しているだけでコストがかかっているという意識を現場のユーザーに持ってもらうことも必要になるでしょう。そのためにも、重複ファイルのアラート機能は必要になりそうです」と話す。「ファイルには機密性の高い情報も含まれますから、ファイルサーバーはセキュリティ面を強く意識して選定する必要があります。先の話にはなりますが、NI+Cさんにもいくつか提案してもらって、さまざまなソリューションの中から最適解を得たいと考えています」。



芙蓉オートリース株式会社
IT・システム部 次長
横尾 陽一氏

ファイルサーバーの課題への向き合い方と同様に、AWSを第一の選択肢とはするものの、Oracle Cloud InfrastructureやGoogle Cloud Platform、Microsoft Azureなどマルチクラウドの利用やOracleとのライセンスコストを考慮したハウジング環境とのハイブリッド環境での展開も視野に入っている。DominoのバージョンアップとAWS移行を成功させ、クラウド化の第1弾が完了すれば、そこで得た経験を生かすことができそうだ。横尾氏は、「ソリューションやシステムごとに最適なクラウドプラットフォームを見極め、私たちの運用にかかる手間とコスト、システムのパフォーマンスをトータルに検討して可能性を広げていきたいと考えています。NI+Cさんには、伴走して常にアドバイスしてもらおうことを期待しています」と話してくれた。

<担当より>

今回のプロジェクトは、仮想サーバーを1台減らしてコストダウンできるタイミングでシステムの更改時期が来るという絶好のタイミングでスタートさせたものです。長く温めてきた構想でしたから、感慨深いものがあります。

AWS環境の構築は、新規のセットアップなのでやったことはシンプルです。とはいえ、AWSに特有の作法があり、横尾様と担当の方々に重点的に説明させていただいたのはその部分。芙蓉オートリース様とは長いお付き合いで、みなさん基本的なスキルが高く、リテラシーを備えていますので、質問のレベルが高く、私たちもしっかり対応するように心がけました。



クラウド事業本部
ハイブリッドクラウド部
第五グループ グループ長
西戸 晋太郎

今後は、段階的に全システムを移行させることとなります。全体最適と個別最適のバランスを取りながらクラウド化を進めていくこととなりますが、私たちとしてもお客様にとって何が最適なのかを十分に検討し、ニーズを先回りして理解した上でサポートしていきたいと考えています。



クラウド事業本部
ハイブリッドクラウド部
第五グループ 主査
原文 崇

関連ソリューション

Amazon Web Services (AWS) 構築・運用サービス
<https://www.niandc.co.jp/sol/aws/>

日本情報通信株式会社について

<https://www.niandc.co.jp/>

日本情報通信株式会社 (NI+C) は、1985年に日本電信電話株式会社と日本アイ・ビー・エム株式会社の合弁会社として設立。システム開発から基盤構築、クラウド化への対応、社内外データ統合とAIによる分析、EDIサービスやセキュリティ、ネットワークサービス、運用

保守までをトータルに提供しています。「おもひをITでカタチに」をスローガンに、先進技術と業務に精通したプロフェッショナルの育成により、お客様の経営課題解決に貢献できる真のベストパートナーを目指しております。



お問い合わせ NIC_Contact@NIandC.co.jp 日本情報通信株式会社 ソリューション担当
記載の会社名、商品名、サービス名は、各社の商標または登録商標です。

ここに記載されている情報は
2024年3月のものです。